

を通して、抽齋、五百の人となり語る事になつたのは事実である。しかし、優善その人が曲折を経て、己れの道を発見しえたその事に鷗外の視点が定まっている。優善がかつての放蕩無頼から身を立て、官吏としてその職責を完うしたのみであつたら、さほど鷗外も心を引かれなかつたであらう。塩田良三も官吏になつた以後の姿を鷗外は追つてはいない。優善が遊興にあつて、なお風狂を忘れず、その精神を生かした所に鷗外の目はある。すなわち、一旦その中に耽溺し、その真髓を劇評という芸術活動にまで昇華させた優善の精神活動を評価せずにはいられなかつたのである。

—一九七六・一・九—

## 正徹の歌

佐佐木幸綱

結論から先に書こう。正徹は、西行、定家と肩を並べて中世歌人のトップに立つ作品世界を実現した歌人である、との評価が、私の内部で徐々に定着しはじめて来たようだ。

『中世の歌人たち』と題する小さな本を書くために、このところ一年近く、中世和歌を集中的に読んできた。いわば門外漢である私

は、西行、定家、実朝、式子内親王といった、まあ、世評の高い歌人たちの作品や、新古今、玉葉、風雅等中世の主だった勅撰集は多少は読んでいたが、中世和歌の大半は未知の作品たちであつて、読み進んでゆく過程はかなりしんどいものであつた。が、同時に、未知の佳作に出遇い発見する喜びにひたれることも時にはあつて、しんどさが多少とも救われたりしたのであつた。その喜びを最も多く味わせてくれたのが正徹である。

正徹は、室町期の歌人である。弘和元年（一三八一）生、長祿三年（一四五九）、七九歳で没。能楽の大成者世阿弥元清より一八、九歳年下、一八歳の年に金閣寺が造営された、と言えば大よその時代がつかめよう。十代で出家し、興福寺、東福寺に勤務した禅僧歌人である。やはり十代の頃、冷泉為伊らを知り歌をつくりはじめたらしいが、冷泉派の論客、武家歌人として著名であつた今川了俊の最晩年の弟子となつて、本格的に短歌を勉強した。

正徹は、古典歌人の中で最もたくさん歌をつくつた歌人であるとしてよい。彼には、弟子の正広が編集した『草根集』という歌集があるが、そこには一万一千首を越える作が収められている。『私家集大成』に収録されている書陵部本には一一、二三七首という膨大な数の歌が収められている（万葉集の二・五倍、古今集の十倍、新古今集の五・五倍という驚くべき数である）。彼の歌論『正徹物語』によると、彼五十歳ちよつとの時に火災にあつて四十代以前の作二万七、八千首を焼いてしまったとあつて、それを加えると、これはもう大へんな数にのぼる。憑かれたように、狂つたようにというか、正徹が連日ひたすら歌をつくりつづけていたさまは、『草根集』をめぐつてみればわかる。

このようにして正徹が追求した歌とは何だったのか。割り切つて言えば、それは、「無心なるものに心をつくる」行為としての歌であり、「心に有りて詞にいはいはれぬもの」をあえて言う試みとしての歌であった。山、雪、霧、花、月、鳥、あるいは炭竈、古寺、海辺の村、さらには夢、恋、思ひ出といった観念の世界にいたるまで、「無心なるものに心をつくる」挑戦を執拗に彼はくり返す。正徹の歌は大半が題詠であるから、〈山〉といつても現実の京都のどの山かを指すのではなく、彼の心の中に棲む〈山〉という概念にすぎなかったが、その山に生命を付加する「うたう」という行為（無心なるものに心をつくる）によって、現実の山以上に山らしい〈山〉を現出させようと彼は願つたのであつた。その「山」は現実の山と似ていないかもしれない。むしろそっくりである可能性は少い。つまり、〈山〉は、ついに山らしさの度合によつて山であるのではない、との認識に正徹は立つのである。能役者の立居振舞が、われわれの日常生活のそれと積極的に絶縁することで成り立っている理由を考えて欲しい。金閣寺は、いわゆる家に似せようとして作った建物であつたかどうか。これらを考え合わせればわかるように、正徹は、室町期の先端的な思想を、狂つたように短歌をつくり続ける中で体現していったのであつた。

吹きしほるあらしも雨になる神のひびきをそへて散る桜かな

あやふしや花のよはひも行春にさきてかたぶく岸の

山吹

行す多も声ぞふりせぬ形見なる昔のかねの今日の夕

暮

吹きしほり野分を鳴らす夕立の風の上なる雲よ木の葉よ

人ごのおもひは雲とかさなれど月ぞむくはぬ影のさやけき

一首目を除いてすべて題詠歌である。一首目は花季の大原野へ行く途中突然の大雷雨に遇つた体験に取材した歌だが、「なる」が「雨になる」「なる神（雷）」の掛詞になっていて一首中で浮いた感じになつているために、「ひびきをそへて散る桜かな」が独立句のごとくに響いて奇怪な世界を現出している。意味的には、雷鳴と稲妻の中にいっきよに散る桜の意なのだが、桜があたかも滝のように自身で轟々と音たてながら落下しているような不思議なイメージを思い描かせる歌である。現実の桜に、これは似ていないかもしれない。しかし、これは正徹にうたわれることで現出したまぎれもない〈桜〉なのである。

題詠歌四首については、いちいち触れている紙幅は残念ながらも無い。しかし、そのどれもが「心に有りて詞にいはいはれぬもの」をあえて言う試みによつてうたい出された、現実の引きうつつではない世界であることは明らかであろう。

現実や日常に絶望し、断念することから出発した中世和歌は、その最末期に、正徹という憑かれたような男によつてその極北をきわめたのであつた。彼には、西行の断念も、定家の絶望もない。あつたのは〈狂〉。〈狂〉のエネルギーによつて現実の向う側へ突破していった、正徹とは不思議な歌人なのである。